

# COSMOS集



子と交わす短歌の話はラインにて時にスタンブ混じりて届く

海豹 芳賀 テル子 福島

海豹の文字読めなくて海胆ウニ海豚イルカ海鼠ネコ海驢コブシと探してみたり

朝々を裏の山より聞えくる小鳥に目覚む姿は見せぬが

新築をして組内に住む家族久方振りに童のをりぬ

花つけず切り倒さうと思ひるし紅梅今年は多に咲きたり

半身の動かぬ我に医師、家族動け動けと声掛けくるる

弥生 土器 萩原 栄子 埼玉

道の駅の建設予定地池上に見出されたり古代の遺跡

埋め戻す池上遺跡見学の許可の葉書にときめける胸

炭化せし糲のかたはら桃の種とがれるままに展示をされき

繋がれし細かきかけら弥生土器の面輪やさしく蘇りたり

竪穴の住居の屋根を支へぬし柱は穴に刺すとふ仕組み

花 冷 え 荒川 ゆみ子 東京

花冷えの町の向かうから革靴の歩幅大きく息子は来たり

花曇り 濃いコーヒーを飲んだけど数独パズルが上手く解けない

そのあととは悲しくなると判りつつ千川通りの桜見に行く

夕暮れの棧橋のやうなベランダに子供の声と黄砂流れ着く

留鳥のやうに東京に暮らすけど春は渡りをしてみたくなる

鈴木 千登世選

「あすなる集」特選

期日前投票 幅寺博光 北海道

腹の満ちまなぶた弛む春の午後もうこれまでとゴロリ転た寝

幾日も人と話さぬ籠り居は声の掠れて語彙も減り来る

声帯も肺活量も鍛へむと音読始むる月刊コスモスの

雲厚く風がそよとも吹かぬ朝不覚な朝寝に長き夢見る

地下鉄とバスを乗り継ぎ期日前投票へ行く気晴らし兼ねて

ブランコのみのお園 多田 美慧子\*宮城

こどもらが遊ぶ公園の遊具消え錆びたるままのベンチがふたつ

グルグルと回る遊具は「危険」ですブランコのみが残る公園

再びはこの土地に住むはなしという子らを見送る帰省のたびに

ぼつりぼつりこどもが歌を詠み始め子育ての日々甦りくる

小島 なお選

桜 渦 巻 く

清 水 佑太郎\*東京

ねえ先生。よければ本棚いりませんか？ 栄転ですか？ 桜渦巻く次、どこで英語を教えるんですか？ 桜の校庭見ながら話す入学式の案内誘導業務するアリーナ三階保護者はまばら始業式を含んでたった三日だけ生徒は俺の言うことを聞く先生の四月の仕事の七割は三月中にやりたかったこと

掛 布 団 塚 本 裕紀子 東京

飛翔する鳩描かれし掛布団いづこへ誘ふ春の眠りを  
老人が立ちて空きたる席に残る膏葉の香は効き目ありしか  
茎や葉を揉むと胡瓜の香がするに胡瓜草とふ誰が揉みしか  
露の丈切りてもらへばレジの娘が良い匂だと目を瞑りたり  
こんなにも人の心を和ませる桜の力空高くあり

本を開いた 富 永 恵美子\*東京

「近づいて下さい」令和五年の三月に言われたためでたい言葉のひとつ  
包丁で茄子をぶすりと切るようなすこしの勇氣 本を開いた  
紹介状もらつてあつてなく終わる六年間の主治医との縁  
牛乳パックの内側くらいに天国は白いかしらじよきじよきと切る  
鍵のかかった夜の菓子屋の棚にあるカヌレのように眠っていたい

何の力か 柴野 房 江 石川

笑ひ乍ら曾孫二人が抱きつきぬ九十一はしつかりと受く  
ひいばの吾を「おはあちゃん」と連呼する小三、小一の女子はやさし  
古家を探検すると曾孫共どたばたするも家よろこぶよ  
思はざる歳になりしが今年の年も下ぐる雛轂ポツポツと食む  
思ふ事と体ちぐはぐ後五ヶ月で九十二とは何の力か

タ ブ ー 風岡 俊 子 静岡

耕運機われの呼吸に合ひてきてあなたと春の風になれた日  
言葉には出せないけれどしみじみと筍ご飯の母の命日  
無造作にムスカリの花挿されあり女子洗面所の明るき一隅  
サッカーの話ばかりをする子らに勉強のこと話すはタブー  
一滴で充分といふ目薬を二滴、三滴(早く治れよ)

原賀 櫻子選

枯野見花壇 高野 哲 司 兵庫

えげやま  
会下山のクロガネモチの思ひ出は牧野博士と出会ひし朝  
ダンチクと六十年ぶりに再会す波音のする海沿ひの寺  
植物学者牧野博士の足跡をたどる旅愉し『植物記』読む  
二見港の主のごとくそびえたつトキワススキの穂の長さこと  
イタドリ「コージーコーナー」設けたる市民とつくる「枯野見花壇」

魚 棚 藤 本 満里子 兵庫

桜咲くも雪の積もりし年ありてダウンコートを片付けずおく  
なぜ今か電話してくる野暮なヤツ決勝戦の九回表に  
いかなごが店頭に並ぶ(魚棚)明石がいちばん活気づく時季  
どうでもよいそんなことないタコ焼きの一つにタコが入つてゐない  
真新しき制服の児とすれちがふわたしも真白きノートを買はう

合格の春 青木淳子 鳥取

三月の暦にそれぞれ孫の名を記す合格発表の日を  
合格の孫に春来てカキフライ六十個揚げ三代で食む  
一合の米の研ぎ方教へたりなんとかなるさわたしの男孫  
一人暮らしはじめる孫の荷は発ちぬさくら花びらまきあげながら  
段取りを忘れ手間取る旅支度三年ぶりなりカバンは何処(いづこ)

出 港 畑 都\*鳥取

淡路へと春の日中を出港し霞んだ六甲振りむきて見る  
岩屋駅の切符売り場に売られている「鳴門オレンジ」まず三個買う  
黄昏の神戸の街に灯が点り行き交う船はみな静かなり  
欄干で覗いた浅瀬の生き物は「ナマコ」と「タコ」に意見が割れる  
集合の写真はシャッター切るまでが長くて何度も笑顔を作る

千の紫陽花 樺 か乃 広島

午前五時自転車軌む音のして新聞「ことん！」今日が始まる

お隣のシマトネリコがまき散らす落葉掃き寄すは修行の心  
苔むして歩くに難し足下にぽんと昔がのつかる参道  
願はくば猫の軽さに飄々と辿り着きたしわれの晩年  
かかげたる首の重たさ推しはかる千の紫陽花咲く阿弥陀寺に  
大野 英子選

心して待て 江崎 玲子\*福岡

玻璃窓を覆いつくして真白なる雪積もるよう小手鞠の春  
暖かな春を彩る花たちもこんなに小さな種より生まるる  
大いなる飛躍の前には大いなる屈伸もあり心して待て  
花粉症実のところは大気汚染花粉はただの運び屋なのだ  
大型化して滅びたる恐竜のようなテレビは窓際にある

二人で笑ふ 福永 邦子 長崎

セーターをブラウスに替へ春まとう皮膚感覚は風に目ざめる  
うつつつけの春雨静かに降り続く宿題の本さあ読みゆかん  
嫁ぎゆく笑顔の孫と対照的に子離れ出来ぬ親は寂しげ  
旧友の手術日なれば逢ひに行く怖くないからね二人で笑ふ  
怒るときパワー全開のわれが居てしばし待てよとブレイキかける

雨 男 村上 京子\*長崎

小太りで白髪頭の八十歳防災マイクが捜しています  
PTAの採め事の愚痴を聞きながら我が来た道を思い返した

世の中の不穏な空気にぞわぞわす強盗襲撃爆弾男  
常識が常識じゃなく新しい決まりが出来てものが言えない  
九十四歳ミッキーマウスは雨男どこか意外で私は好きだ

慣れたスツピン 大津 慧美子 大分

ぼたもちの小豆ねりつつ応援すWBCメキシコ戦を  
三年ぶりに口紅させば恥づかしく拭ひて慣れたスツピンに戻す  
グランドゴルフを楽しむ我らの上空を鴉と鳶は闘ひてをり  
カート引き義姉は持ち来る香りよき露とレタスとスナップエンドウ



年毎に熟るる頃合早まると桜桃の網かけ準備する夫

水色リボン 福重 いく子\*宮崎

零れくる空の欠片を拾うごとつほみを開く黄のチューリップ  
地球には水色リボンが似合うかな飾つてあげたい讃えてあげたい  
三十年振りに妹帰り来るあふれる南の花を巡ろう

レタス水菜春菊新玉バリバリのサラダに口がもう踊りだす  
「骨折った」「川で溺れた」言い合えば昔のまんま四人兄弟

鈴木 竹志選 「その二集」特選

短歌記念日 浜野 昌子\*北海道

夫と生き三十九年の記念日にひそかにプラスす「短歌記念日」  
木々芽ぶく林の奥よりキョキョキョキョと声のみなれど多分エゾリス  
庭に来るヒヨドリのため置くリンゴお先にとばかりカラスが散らす  
友からの便りのペン字懐かしや筆圧強く吾を励ます  
いま一度教壇に立つよろこびに畏れもすこし春しぐれ降る

春のアカウント 谷 真樹\*神奈川

たくさんの片手袋をぶらさげてただのひとつも対なき辛夷  
もくれんの花ほころびて知らぬまにロケインをする春のアカウント  
愚痴ばかり吐くあのひとへこの桜くちいっぱいに詰めてあげよう  
春先のたまねぎの皮はぐように髪アイロンをすべらしてゆく  
縁石のすき間に一輪スマイル咲く急ぎまたいで駆へと向かう

ぶらり亀戸 伊藤 弘通\*東京

風向きに直角に降下するとんびはまさに獲物を狙う戦闘機

江ノ島の子供の頃の記憶では今よりもっと磯の香に満つ

藤の花どこかさびしげに咲きたれば晴れの日よりも雨がふさわしい

亀戸線世田谷線に荒川線大東京に残るローカル線

亀戸の駅ビルにあるとんかつ屋そこから見えるスカイツリーが好き

発 光 器 清 水 美 里\*東京

行きつけの梅に届かぬ眼球をせめて図書館まで連れて行く

もう二度と発光しない発光器山と積みあげホタルイカ喰う

(SKIP)をタツツ桜が花開く力に今は勝てそうにない

長靴を履いているのは躊躇なく波打ち際を踏みしめるため

イルカショー見向きもせぬ子どちらかといえはおそらくイルカに近く

眼が丸くなる 宮 梓 一\*東京

「フライトは何時だっけ?」と聞いてくる「フ」のところがもう浮ついている

眼が丸くなつてゐる人は旅行者 砲丸ほどはあるかき水

古城山から見下ろせる玄界の灘の真下を歩いて渡る

百万の帰らぬ人を見送った門司の港でカレーを食べる

グラバー邸から見る夕陽 長崎は今日も明日も晴れてる予報

桑原 正紀選

春 を O N 清 水 由美子\*長野

かき回す木べら鍋底に一本の道ひけた時ジャム仕上がりぬ

連翹やスイセン、ミモザ、ママレード黄色がわれの春をONにす

露の臺ザクザク刻みふきみそにすれば小鉢に弥生の肴

低く飛ぶ今年初めて会うつばめ春雨上がりの朝の吉兆

夜はよく眠れてますか? 食欲は? まず聞いてから薬を渡す

理容店閉づ 山 田 一 弥 岐 卓

再入院の決まりたる日に妻の言ふ我が理容店清らに閉づと

理容店閉ぢるを知りて向かひの子ブーケ持ち来るジャスマン匂ふ

我が理容店七十二年の幕を閉づさりげなく咲く雪柳しろし

まひるまに引き取られゆくサインポール風吹き上げしとくら蕊つけ

トラックは理容椅子積み左折せり見えなくなれど妻と付む

リスボンにて 権 田 陽 子 静 岡

もう何も追ひかけて来ぬと息を吐く異国語飛び交ふ成田空港

潮の香の満ちたる都リスボンに瓦斯灯ともり迷ひ子の我

道を問へばはにかむやうに首を振る褐色の君の祖国を思ふ

イスラムの香り残せるリスボンに葡萄唐草の中皿求む

鼻先をひゆんと掠めて燕飛ぶ時空のひづみの一瞬見えたり

桜をさわる 岩 館 澄 江\*愛知

道端で黒人たちが売っていたヒップホップのTシャツを買う

意志力の低さによって飲みましたバナナシエイクという飲み物を

落ちていたツナを発見した蟻が油まみれで苦戦している

人間の都合によつて口に輪をはめられた犬「わうわう」と鳴く

ほつぺたを包み込むようぼんぼんと桜をさわるひやりやんわり

言葉の塔 小田 沙也加\*愛知

郵便は明後日届く 一週間前の空気を閉じ込めながら  
音響はハウリングして耳鳴りのようにゆるく途切れるセミナー  
目的も理念も具体的手法も複数あつて掃除はきらい  
名前さえ知らない画家の絵を買いたい 言葉でできた塔を建てたい  
踏み外すことは滅多にないけれど なんのレビュウも見ずに買う本  
水上 芙季選

筈ごろん 浦木 妙子\*鳥取

たんぼの綿毛にふうつと息吹けばブリマになりてビルエット舞う  
もう少し痩せたら着られるワンピース四月の窓の風に揺らせり  
砲弾のような頭を突き出して筈によきによき競いて伸びる  
筈を傷つけぬよう少しづつ鉄で土除けグイッと掘り上ぐ  
掘りたての筈ごろんと置かれて朝日を受けて鬼皮光る

どこにあるのか 岡崎 清和 香川

しらじらとコメンテーターが戦争を解説してゐる安全な場所  
情けないや米一袋を持ちかねる弱きからだにまた春が来た  
里住むも誰にも会はず歩きをりともがきたちはどこにあるのか  
湖面には鴨がむれなす宝山湖<sup>ほうやまう</sup>さらさらひかり春日のぞけり

たちねの母を乗せ行く春の午後車窓のけしきうすれて過ぎる

鏡のわたし 松岡 綾子 香川

満開の桜と平和のかぜを受けて元安川のクルーズにひとり  
デッキより見上げる桜のカーテンがしばし隠せり原爆ドーム  
どれほどに視線浴びたか裸婦像はすぐと立ちゐる緑の苑に  
サーカスのライオンのごとよむ目の鏡のわたし夜更かしの付け  
「ここに来たら恋が破れる」とふ伝説の栗林公園夜桜映える

またやつた 白井 玲子 佐賀

墓守が出来ず群馬の墓しまふ赤城おろしを避けて弥生に  
失敗も時にはあるさ玄関の鏡よ写せ笑顔のわたし  
帰省する孫のオーダー数多あり夫と連れ立ちスパーめぐる  
またやつた焦がしてしまつたフライパンセラミックあり鉄製もあり  
紅椿苔の緑にぼとり落つ蕊の黄色を艶やかに見せ

猫背矯正肌着 柿原 和子\*熊本

名前なき野良の小猫は駈けてくる私の足音聞こえるらしい  
山が好きそんな笑顔の写真は無くても伝わるんだな  
コンクリの隙間に咲いたタンポポはふれずにおこう飛んでゆくまで  
通販の猫背矯正肌着買う腹囲がじゃましてものにはならず  
古稀迄に直すと決めた我がねこ背喜寿まで延ばし挑戦中です